ジュニアテニスプレイヤーの性格について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2013-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 伸明 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/14850

明治大学教養論集　通巻468号
(2011・3) pp. 49-68

ジュニアテニスプレイヤーの性格について

田　中　伸　明

I. 緒　　言

これまでに，ジュニアテニスプレイヤーを対象としたメンタル面の調査は，集中力に対して行われた調査[(1),(2),(3)]や心理的競技能力に対して行われた調査[(4)]などがある。このジュニアという時期は，「トップレベルへの準備段階であるとともに，多くの種目において発育期と重なり，この期における心身のトレーニングは発育発達を考慮した特殊な条件が重要な問題である。特に心理面のトレーニングに関しては，成人期への競技力向上にとって欠くことのできない基礎づくりが充分に考慮されなければならない」[(5)]といわれている。したがって，このジュニア期にメンタルマネージメントを行うことは大変重要なことであるということである。そのためには，ジュニア期のプレイヤーの特徴を様々な角度から把握していくことが重要なことであるといえるが，その特徴の基本的な要素ともいえる性格に関して，ジュニアテニスプレイヤーを対象として分析されてきたのは，田中ら[(1),(6)]による報告のみのようである。しかし，この報告は，調査対象が競技レベルの高い国内トップレベルのジュニアテニスプレイヤーであった。ジュニア期のメンタルマネージメントをより有益なものにするためには，もう少し裾野を広げ，地域レベル，すなわち，都道府県トップレベルでの性格的特徴を把握する必要があるといえる。

この性格について，丹野[(7)]は，「研究が蓄積するにつれて，最近では，5

つの因子によって性格をほぼ記述できるという5因子論に収束してきている」と記載している。そしてその5因子は基本的な性格の次元として「外向性」,「協調性」,「良識性」,「情緒安定性」,「知的好奇心」の5つとされ，これらを測定するために村上ら[(8),(9),(10),(11)]により，主要5因子性格検査を作成されてきた。

そこで本研究では，地域レベルのジュニアテニスプレイヤーを対象に主要5因子をもとにした性格検査を実施し，この世代に対し，より多くの効果的なアドバイスや指導・コーチングをできるようにするために，テニスプレイヤーのジュニア世代の特徴をより多く明らかにすることを目的とした。

Ⅱ．方　　法

1．調査対象

2004年度および2007年度に開催された財団法人日本テニス協会地域ジュニア強化合宿参加者，男子165名（有効回答者数149名）で12.5±1.1歳，女子167名（有効回答者数147名）で12.2±0.9歳であった（表1）。開催された地域は，北海道，東北，関東，北信越，東海，関西，中国，四国，九州の全国9地域であった。

表1　調査対象者年齢

	N	*M*	*SD*
男　子	165(149)	12.5	1.1
女　子	167(147)	12.2	0.9

（　）内は有効回答者数

2．調査期間及び調査方法

2004年度に開催された強化合宿は，2004年10月～2005年2月，2007年度に開催された強化合宿は，2007年9月～2008年2月の期間であった。1

地域あたりの合宿は，1泊2日から2泊3日であった。それぞれの地域での合宿期間中に，開催地において集合調査にて行った。

3. 調査内容

性格の調査については，基本的な性格の次元とされる「外向性」，「協調性」，「良識性」，「情緒安定性」，「知的好奇心」を測定することができる村上らの作成した主要5因子性格検査[(8),(9),(10),(11)]を使用した（以下，BIG FIVE とする）。この検査は，質問項目が70項目からなり，「はい」，「いいえ」のいずれかを選択する回答形式であった。BIG FIVE の測定尺度は，表2の通りであった。

4. 結果の処理

コンピューターソフトウェアの主要5因子性格検査システム[(10)]を使用して尺度別に集計を行った。その際に，「？：不応答」が，素点で2点以上あった回答者は削除した。そしてまずは，性差をみるために性別による比較，そして同世代一般との比較，さらに，男子においては，同世代国内トップジュニアプレイヤーとの比較を行った。同世代国内トップジュニアテニスプレイヤーとは，日本国内のジュニアトーナメントにおいて，上位にくるようなプレイヤーのことである。この同世代国内トップジュニアのデータは，田中ら[(6)]の報告によるものを使用した。

統計処理は尺度毎に等分散検定（F 検定）を行ったあと，等分散の場合は通常の平均値の差の検定（t 検定），分散の異なる場合はウェルチの検定を行った。

Ⅲ　結果および考察

1. ジュニアテニスプレイヤー男女の比較

表3は，ジュニアテニスプレイヤーの男子プレイヤーと女子プレイヤーの

表2　BIG FIVE 尺度

	? 不応答	1点	質問の意味が理解できなかったり，回答の決断がつかなかったり，テストに非協力的であった可能性がある
		2点以上	1点の場合と解釈は同じであるが，できれば再検査が必要
妥当性尺度	F 頻　度	低得点	社会的に良いと認められていないことや，心理的に異常な内容を認めないように用心している
		高得点	でたらめに回答したか，心理的に混乱している。冷淡で，気難しく反抗的な印象を与える
	Att 建　前	低得点	解釈しない
		高得点	建前で回答したと考えられる。付き合い好きで，有能で自信があり，成功を求めて，仕事をやり通すという印象を与えようとしている
基本尺度	E 外向性	低得点	非常におとなしく，恥ずかしがり屋で，地味な人
		高得点	社交的，外向的で，人と積極的に付き合って話すことが大変好きである
	A 協調性	低得点	自分のことを真っ先に考え，人に同情したり，親切にする気がない
		高得点	誰にでも親切で，暖かみのある人
	C 良識性	低得点	根気がなく，何ごとも中途半端でやめる怠惰な人
		高得点	自分自身を厳しく律して，物事に取り組む姿勢が非常に強い方である
	N 情緒安定性	低得点	神経質で，情緒的に不安定な人
		高得点	気楽で自信があり，情緒的に大変安定している
	O 知的好奇心	低得点	考えるのが苦手な人
		高得点	知性的で，思慮深い，洗練された人

表3　ジュニアテニスプレイヤー尺度別得点および検定結果

		男　子 N=149	女　子 N=147	t 値
?	M	0.11	0.19	1.95
不応答	SD	0.31	0.39	†
F	M	2.11	1.73	2.21
頻　度	SD	1.50	1.46	*
Att	M	5.56	5.28	1.03
建　前	SD	2.29	2.38	ns
E	M	8.29	8.51	0.63
外向性	SD	3.07	2.94	ns
A	M	8.49	8.99	1.83
協調性	SD	2.32	2.39	†
C	M	7.14	6.95	0.54
良識性	SD	2.97	3.06	ns
N	M	7.36	7.41	0.13
情緒安定性	SD	3.13	3.40	ns
O	M	4.89	3.76	3.59
知的好奇心	SD	3.04	2.33	***

***: $p<0.001$　*: $p<0.05$　†: $p<0.01$

t 検定結果を表したものである。その結果，「F：頻度」($p<0.05$)，および「O：知的好奇心」($p<0.001$) においては，男子プレイヤーの方が女子プレイヤーよりいずれも有意に高かった。また，「？：不応答」，および「A：協調性」において，女子プレイヤーの方が男子プレイヤーよりも高い傾向がみられた ($p<0.10$)。そして，「Att：建前」，「E：外向性」，「C：良識性」，「N：情緒安定性」では，有意差はみられなかった。

(1)「F：頻度」

妥当性尺度である「頻度」の得点が，男子プレイヤーの方が女子プレイヤーよりも有意に高かった。

「頻度」とは，高得点の場合，「でたらめに回答したか，心理的に混乱している。冷淡で，気難しく反抗的な印象を与える」ということであり，低得点の場合，「社会的に良いと認められていないことや，心理的に異常な内容を認めないように用心している」ということである。したがって，男子プレイヤーの方が，「でたらめに回答したか，心理的に混乱している。冷淡で，気難しく反抗的な印象を与える」ということがいえるが，このF尺度の解釈としては，平均から±0.5 SDであれば「質的に理性的，かつ，適切に回答している。ストレスから自由で，適応は良好な場合が多い」[11]とされている。「F：頻度」の同世代一般の男子の値は，2.03±1.59，女子の値は，1.79±1.51であるので，ジュニアテニスプレイヤーの男子2.11±1.50，女子1.73±1.46は，「質的に理性的，かつ，適切に回答している。ストレスから自由で，適応は良好」ということになるので，大きな問題となる結果ではなかったといえる。

(2)「O：知的好奇心」

基本尺度である「知的好奇心」の得点が，男子プレイヤーの方が女子プレイヤーよりも有意に高かった。

「知的好奇心」とは，「思慮深さ，洗練，好奇心を意味し，広範囲の情報を知ったり，体験することに強い関心を持つ。そして物事の本質を見抜く能力や，難問と遭遇した場合でも冷静沈着に対処できるかどうか」といったことである。したがって，男子プレイヤーの方が，女子プレイヤーと比較すると，「思慮深さ，洗練，好奇心を意味し，広範囲の情報を知ったり，体験することに強い関心を持つ。そして物事の本質を見抜く能力や，難問と遭遇した場合でも冷静沈着に対処できるかどうか」が高い，ということである。以上の

ことから，男子プレイヤーには様々な情報，たとえば，世界的な選手に関することなどといった情報をうまく活用すると，そこから学び取るといったことや上達するといったきっかけになりやすいのではないかといえる。また，女子プレイヤーについては，「思慮深さ，洗練，好奇心」といった点について，多少注意深く接していく必要があるのではないかといえる。

(3)「？：不応答」

妥当性尺度である「不応答」の得点が，女子プレイヤーの方が男子プレイヤーよりも高い傾向であった。

「不応答」とは，回答できなかった設問の数であり，1点の場合「質問の意味が理解できなかったり，回答の決断がつかなかったり，テストに非協力的であった可能性がある」ということである。男子，女子ともに平均がそれぞれ0.11，0.19であったので，上記のようなことではないということがいえる。しかしながら，女子プレイヤーの方が高い傾向であったということは，若干，女子プレイヤーの方が，男子プレイヤーと比較すると，「質問の意味が理解できなかったり，回答の決断がつかなかったり，テストに非協力的であった可能性がある」という傾向があったということであろう。

(4)「A：協調性」

基本尺度である「協調性」の得点が，女子プレイヤーの方が男子プレイヤーよりも高い傾向であった。

「協調性」とは，低得点の場合「自分のことを真っ先に考え，人に同情したり，親切にする気がない」であり，高得点の場合「誰にでも親切で，暖かみのある人」である。したがって，女子プレイヤーの方が，男子プレイヤーと比較すると，若干，「誰にでも親切で，暖かみのある人」であるという傾向があったといえる。以上のことから，女子プレイヤーに対しては，みんなで何かをしていくようなメニューを考えていくことがよいと思われる。男子

プレイヤーの場合には，まわりの人に対して気を配ることができるようになるような指導を考えていく必要があるのではないかといえる。

2. ジュニアテニスプレイヤーと同世代一般人の比較

表4は，男子のジュニアテニスプレイヤーの同世代一般男子の t 検定結果を表したものである。その結果，「？：不応答」（$p<0.01$），「Att：建前」

表4　ジュニアテニスプレイヤーと同世代の比較（男子）

同世代一般のデータは村上ら[9]より

		ジュニア テニスプレイヤー $N=149$	同世代 一　般 $N=123$	t 値
?	*M*	0.11	0.02	3.13
不応答	*SD*	0.31	0.15	**
F	*M*	2.11	2.03	0.43
頻　度	*SD*	1.50	1.59	ns
Att	*M*	5.56	4.54	3.57
建　前	*SD*	2.29	2.41	***
E	*M*	8.29	6.69	3.81
外向性	*SD*	3.07	3.73	***
A	*M*	8.49	7.93	1.85
協調性	*SD*	2.32	2.68	†
C	*M*	7.14	5.19	5.19
良識性	*SD*	2.97	3.22	***
N	*M*	7.36	5.83	3.72
情緒安定性	*SD*	3.13	3.66	***
O	*M*	4.89	5.22	0.89
知的好奇心	*SD*	3.04	3.02	ns

***：$p<0.001$　**：$p<0.01$　†：$p<0.10$

(p<0.001)，「E：外向性」(p<0.001)，「C：良識性」(p<0.001)，および「N：情緒安定性」(p<0.001) においては，男子ジュニアテニスプレイヤーの方が同世代一般男子よりいずれも有意に高かった。また，「A：協調性」において，男子ジュニアテニスプレイヤーの方が同世代一般男子よりも高い傾向がみられた (p<0.10)。そして，「F：頻度」，および「O：知的好奇心」では，有意差はみられなかった。

表5　ジュニアテニスプレイヤーと同世代の比較（女子）

同世代一般のデータは村上ら[9]より

		ジュニア テニスプレイヤー N=147	同世代 一　般 N=131	t 値
?	M	0.19	0.07	2.97
不応答	SD	0.39	0.28	**
F	M	1.73	1.79	0.34
頻　度	SD	1.46	1.51	ns
Att	M	5.28	3.95	4.61
建　前	SD	2.38	2.42	***
E	M	8.51	6.80	4.20
外向性	SD	2.94	3.75	***
A	M	8.99	8.44	1.86
協調性	SD	2.39	2.55	†
C	M	6.95	5.14	4.90
良識性	SD	3.06	3.09	***
N	M	7.41	5.33	4.97
情緒安定性	SD	3.40	3.57	***
O	M	3.76	3.88	0.38
知的好奇心	SD	2.33	2.90	ns

***：p<0.001　**：p<0.01　†：p<0.10

表5は，女子のジュニアテニスプレイヤーの同世代一般女子の t 検定結果を表したものである。その結果，「？：不応答」（$p<0.01$），「Att：建前」（$p<0.001$），「E：外向性」（$p<0.001$），「C：良識性」（$p<0.001$），および「N：情緒安定性」（$p<0.001$）においては，女子ジュニアテニスプレイヤーの方が同世代一般女子よりいずれも有意に高かった。また，「A：協調性」において，女子ジュニアテニスプレイヤーの方が同世代一般女子よりも高い傾向がみられた（$p<0.10$）。そして，「F：頻度」，および「O：知的好奇心」では，有意差はみられなかった。

以上の結果から，男子と女子では，いずれも同様の結果であったことが明らかとなった。

(1)「？：不応答」

妥当性尺度である「不応答」の得点が，ジュニアプレイヤーの方が同世代一般人よりも有意に高かった。

「不応答」とは，回答できなかった設問の数であり，1点の場合「質問の意味が理解できなかったり，回答の決断がつかなかったり，テストに非協力的であった可能性がある」ということである。したがって，同世代の一般人と比較するとジュニアテニスプレイヤーのほうが，「質問の意味が理解できなかったり，回答の決断がつかなかったり，テストに非協力的であった可能性がある」ということになるが，男子，女子ともに平均がそれぞれ0.11，0.19であったので，上記のようなことではないということがいえる。しかしながら，ジュニアテニスプレイヤーの方が有意に高かったということは，「質問の意味が理解できなかったり，回答の決断がつかなかったり，テストに非協力的であった可能性がある」ということであったということある。したがって，ジュニアテニスプレイヤーに対して，今回実施したテスト（BIG FIVE）を実施する際には，質問の意味や内容についてちゃんと伝わるような注意が必要になってくるといえるのではないだろうか。

(2)「Att：建前」

妥当性尺度である「建前」の得点が，ジュニアテニスプレイヤーの方が同世代一般人よりも有意に高かった。

「建前」とは，低得点の場合「解釈しない」，高得点の場合「建前で回答したと考えられる。付き合い好きで，有能で自信があり，成功を求めて，仕事をやり通すという印象を与えようとしている」ということである。したがって，ジュニアテニスプレイヤーの方が，「付き合い好きで，有能で自信があり，成功を求めて，仕事をやり通す印象を与えようとしている」ということである。今回，調査対象となったジュニアテニスプレイヤーは，地域レベルのプレイヤーである。地域レベルということは，都道府県レベルでは，トップのプレイヤーということである。やはり都道府県レベルとはいえ，トップになるためには，「日々の努力」であったり，より高いレベルへ行くためには，「こうしたい」，「こうありたい」，「こうならなければならない」といった理想像を持っているためではないかと考えられる。

(3)「E：外向性」

基本的尺度である「外向性」の得点が，ジュニアテニスプレイヤーの方が同世代一般人よりも有意に高かった。

「外向性」とは，低得点の場合「非常におとなしく，恥ずかしがり屋で，地味な人」，高得点の場合「社交的，外向的で，人と積極的に付き合って話すことが大変好きである」ということである。したがって，ジュニアテニスプレイヤーの方が，「社交的，外向的で，人と積極的に付き合って話すことが大変好きである」ということである。

テニスという競技がどちらかというと個人競技であることから，より「外向性」が求められることや，今回の地域レベルのジュニアテニスプレイヤーは，都道府県のトッププレーヤーということから，都道府県のトップともなれば，都道府県のトップが集まる地域大会やさらに全国大会などに出場して

いく機会が多くなることなどにより，より多く人と接する機会が増えるために，同世代一般人よりも「外向性」が高くなるということであろう。また，テニスをすることにより，「外向性」が高くなるということもいえるであろう。

(4)「C：良識性」

基本的尺度である「良識性」の得点が，ジュニアテニスプレイヤーの方が同世代一般人よりも有意に高かった。

「良識性」とは，低得点の場合「根気がなく，何ごとも中途半端でやめる怠惰な人」，高得点の場合「自分自身を厳しく律して，物事に取り組む姿勢が非常に強い方である」ということである。したがって，ジュニアテニスプレイヤーの方が，「自分自身を厳しく律して，物事に取り組む姿勢が非常に強い方である」ということである。

これらの結果は，都道府県のトッププレーヤーになるためには，「良識性」が必要であるということを表しているといえる。したがって，なかなかトップへといけないようなプレイヤーには，「自分自身を厳しく律して，物事に取り組む姿勢」が必要なことを理解させ，実践させていくようなことが必要になってくるといえる。

(5)「N：情緒安定性」

基本的尺度である「情緒安定性」の得点が，ジュニアテニスプレイヤーの方が同世代一般人よりも有意に高かった。

「情緒安定性」とは，低得点の場合「神経質で情緒的に不安定な人」，高得点の場合「気楽で自信があり，情緒的に大変安定している」ということである。したがって，ジュニアテニスプレイヤーの方が，「気楽で自信があり，情緒的に大変安定している」ということである。

これらの結果は，都道府県のトップになるためには，「情緒安定性」が必要であるということを表しているといえる。言い換えるならば，困難な問題

に対しても動揺せずに冷静に対応できる，義務的なことに対しても落ち着いた態度で対応できるということである。したがって，なかなかトップへいけないようなプレイヤーには，情緒的に安定していくようなアドバイス，指導が求められるといえるであろう。

(6)「A：協調性」

基本尺度である「協調性」の得点が，ジュニアテニスプレイヤーの方が同世代一般人よりも高い傾向であった。

「協調性」とは，低得点の場合「自分のことを真っ先に考え，人に同情したり，親切にする気がない」であり，高得点の場合「誰にでも親切で，暖かみのある人」である。したがって，ジュニアテニスプレイヤーの方が，同世代一般人と比較すると，若干，「誰にでも親切で，暖かみのある人」であるという傾向があったといえる。以上のことから，テニスをしていくことにより，「協調性」が高まるのではないかと推察できる。

3. 男子地域ジュニアと男子トップジュニアの比較

表6は，男子の地域ジュニアテニスプレイヤーとトップジュニアテニスプレイヤーのt検定結果を表したものである。トップジュニアテニスプレイヤーのデータは，田中ら[6]の報告によるものである。その結果，「Att：建前」($p<0.001$)，「E：外向性」($p<0.001$)，「A：協調性」($p<0.001$)，「C：良識性」($p<0.05$)，および「O：知的好奇心」($p<0.001$) においては，男子トップジュニアテニスプレイヤーの方が男子地域ジュニアテニスプレイヤーよりいずれも有意に高かった。そして，「？：不応答」，「F：頻度」，および「N：情緒安定性」においては，有意差はみられなかった。

(1)「Att：建前」

妥当性尺度である「建前」の得点が，男子トップジュニアテニスプレイヤー

表6　地域ジュニアとトップジュニアの比較（男子）

トップジュニアのデータは田中ら[6]より

		地　域 ジュニア N=149	トップ ジュニア N=31	t 値
?	M	0.11	0.13	0.32
不応答	SD	0.31	0.34	ns
F	M	2.11	1.87	0.84
頻　度	SD	1.50	1.18	ns
Att	M	5.56	8.10	5.83
建　前	SD	2.29	1.74	***
E	M	8.29	10.39	4.82
外向性	SD	3.07	1.98	***
A	M	8.49	10.23	3.86
協調性	SD	2.32	2.08	***
C	M	7.14	8.52	2.41
良識性	SD	2.97	2.57	*
N	M	7.36	7.00	0.56
情緒安定性	SD	3.13	3.79	ns
O	M	4.89	7.32	3.89
知的好奇心	SD	3.04	3.70	***

***：$p<0.001$　*：$p<0.05$

の方が男子地域ジュニアテニスプレイヤーよりも有意に高かった。

「建前」とは，低得点の場合「解釈しない」，高得点の場合「建前で回答したと考えられる。付き合い好きで，有能で自信があり，成功を求めて，仕事をやり通すという印象を与えようとしている」ということである。したがって，トップジュニアテニスプレイヤーの方が，「付き合い好きで，有能で自信があり，成功を求めて，仕事をやり通す印象を与えようとしている」とい

うことである。

調査対象となった地域ジュニアテニスプレイヤーは，地域レベルのプレイヤーであり，さらにその上のレベルがトップジュニアテニスプレイヤーということである。地域ジュニアテニスプレイヤーは，同世代一般人よりも「建前」が有意に高かったわけであるが，トップジュニアテニスプレイヤーはさらに「建前」が有意に高かったということである。これらのことは，トップジュニアテニスプレイヤーは，より高いレベルに行くために，「より多くの日々の努力」であったり，「よりこうしたい」，「よりこうありたい」，「よりこうならなければならない」といった理想像を持っているためではないかと考えられる。しかし，あまりに得点が高くなっているということは，基本的に「建前」であるので，いわゆる見せかけだけになっている場合も考えられるので，細かい観察・分析が必要になってくると思われる。

(2) 「E：外向性」

基本的尺度である「外向性」の得点が，男子トップジュニアテニスプレイヤーの方が男子地域ジュニアテニスプレイヤーよりも有意に高かった。

「外向性」とは，低得点の場合「非常におとなしく，恥ずかしがり屋で，地味な人」，高得点の場合「社交的，外向的で，人と積極的に付き合って話すことが大変好きである」ということである。したがって，トップジュニアテニスプレイヤーの方が，「社交的，外向的で，人と積極的に付き合って話すことが大変好きである」ということである。

調査対象となった地域ジュニアテニスプレイヤーは，地域レベルのプレイヤーであり，さらにその上のレベルがトップジュニアテニスプレイヤーということである。地域ジュニアテニスプレイヤーは，同世代一般人よりも「外向性」が有意に高かったわけであるが，トップジュニアテニスプレイヤーはさらに「外向性」が有意に高かったということである。トップジュニアテニスプレイヤーは，国内の試合はもとより，海外への遠征ということを多く経

験している。海外遠征では，練習コート・練習相手の確保やホテルでの滞在，会場から会場への移動など，コミュニケーション能力がより必要になる場面が多くなり，他人と積極的に関わっていくことが求められる。トップジュニアテニスプレイヤー達は，これらの経験を経て，「外向性」がより高くなっているということがいえるであろう。したがって，海外への挑戦が視野に入ってくるぐらいのレベルになるようなプレイヤー，もしくは，世界という目標を掲げるようなプレイヤーには，「外向性」の必要性を認識させ，高めていくようなことが必要になってくるであろう。

(3)「A：協調性」

基本尺度である「協調性」の得点が，男子トップジュニアテニスプレイヤーの方が男子地域ジュニアテニスプレイヤーよりも有意に高かった。

「協調性」とは，低得点の場合「自分のことを真っ先に考え，人に同情したり，親切にする気がない」であり，高得点の場合「誰にでも親切で，暖かみのある人」である。したがって，トップジュニアテニスプレイヤーの方が，地域ジュニアテニスプレイヤー比較すると，「誰にでも親切で，暖かみのある人」であるということである。

テニスという競技は個人競技ではあるので，「協調性」はいらないのではないかと考えることもできるが，都道府県トップから国内トップへとなっていくためには，より「協調性」が必要になってくるということある。これは確かに，試合中はシングルスであれば一人でプレーし，ルール上，試合中にコーチや指導者などからアドバイスをもらうことはできないので，試合に入ってしまえば明らかに個人競技であるといえるが，その状況になるまでには，親，親族，兄弟，仲間，コーチ，トレーナー，練習パートナー，支援してくれる人・企業，ファンなどといった多くの人々との関わりが大切である。これらのことは，より競技レベルが上がるにつれ，より重みを増していくものである。したがって，「テニスは個人競技だから協調性は不要だ」というこ

とにはならないように，指導者やコーチ，親といった指導する立場の人間は，こどもがテニスを始める時から「協調性」を意識したアドバイス，指導が求められるといえるであろう。

(4) 「C：良識性」

基本的尺度である「良識性」の得点が，男子トップジュニアテニスプレイヤーの方が男子地域ジュニアテニスプレイヤーよりも有意に高かった。

「良識性」とは，低得点の場合「根気がなく，何ごとも中途半端でやめる怠惰な人」，高得点の場合「自分自身を厳しく律して，物事に取り組む姿勢が非常に強い方である」ということである。したがって，トップジュニアテニスプレイヤーの方が，地域ジュニアテニスプレイヤーと比較すると，「自分自身を厳しく律して，物事に取り組む姿勢が非常に強い方である」ということである。

これらの結果は，都道府県トップから国内トップとなるためには，「良識性」が必要であるということを表しているといえる。つまりトップを目指すのであれば，「自分自身を厳しく律して，物事に取り組む姿勢」がより必要であるということである。したがって，本当にトップを目指すということであるならば，「より自分自身を厳しく律して，物事に取り組む姿勢」が重要なことであるということを理解させ，実践させていくようなことが必要になってくるといえる。

(5) 「O：知的好奇心」

基本尺度である「知的好奇心」の得点が，男子トップジュニアプレイヤーの方が男子地域ジュニアテニスプレイヤーよりも有意に高かった。

「知的好奇心」とは，「思慮深さ，洗練，好奇心を意味し，広範囲の情報を知ったり，体験することに強い関心を持つ。そして物事の本質を見抜く能力や，難問と遭遇した場合でも冷静沈着に対処できるかどうか」といったこと

である。したがって，トップジュニアテニスプレイヤーの方が，地域ジュニアテニスプレイヤーと比較すると，「思慮深さ，洗練，好奇心を意味し，広範囲の情報を知ったり，体験することに強い関心を持つ。そして物事の本質を見抜く能力や，難問と遭遇した場合でも冷静沈着に対処できるかどうか」が高いということである。

これらの結果は，都道府県トップから国内トップとなるためには，「知的好奇心」が必要である，ということを表しているといえる。つまり，トップを目指すのであれば，「思慮深さ，洗練，好奇心を意味し，広範囲の情報を知ったり，体験することに強い関心を持つ。そして物事の本質を見抜く能力や，難問と遭遇した場合でも冷静沈着に対処できるかどうか」がより必要であるということである。したがって，ジュニアテニスプレイヤーが，本当にトップを目指すということであるならば，「常に自分の内外にある情報を正しくつかみ，それらをうまくかみ砕いて自分のものにしていくか，さらには，つねに上を目指すような意識」といったことが必要であるということを充分に理解させ，実践させていくようなことが必要になってくるといえる。

Ⅳ　ま と め

本研究は，ジュニアテニスプレイヤーの性格について調査・報告することを目的とした。

調査対象は，2004年度（2004年10月～2005年2月）および2007年度（2007年9月～2008年2月）に開催された財団法人日本テニス協会地域ジュニア強化合宿参加者，男子165名（有効回答者数149名，12.5±1.1歳），女子167名（有効回答者数147名，12.2±0.9歳）であった。調査内容は，主要5因子性格検査による性格に関する調査を行った。

結果は次の通りであった。

(1) ジュニアテニスプレイヤーの性差について

「F：頻度」($p<0.05$)，および「O：知的好奇心」($p<0.001$) においては，男子プレイヤーの方が女子プレイヤーよりも有意に高かった。また，「？：不応答」および「A：協調性」において，女子プレイヤーの方が，男子プレイヤーよりも高い傾向がみられた ($p<0.10$)。そして，「Att：建前」，「E：外向性」，「C：良識性」，「N：情緒安定性」では，有意差はみられなかった。

(2) 男子ジュニアテニスプレイヤーと同世代一般男子の比較

「？：不応答」($p<0.01$)，「Att：建前」($p<0.001$)，「E：外向性」($p<0.001$)，「C：良識性」($p<0.001$)，および「N：情緒安定性」($p<0.001$) においては，男子ジュニアテニスプレイヤーの方が，同世代一般男子よりも有意に高かった。また，「A：協調性」において，男子ジュニアテニスプレイヤーの方が同世代一般男子よりも高い傾向がみられた ($p<0.10$)。そして，「F：頻度」，および「O：知的好奇心」では，有意差はみられなかった。

(3) 女子ジュニアテニスプレイヤーと同世代一般女子の比較

男子プレイヤー同様，「？：不応答」($p<0.01$)，「Att：建前」($p<0.001$)，「E：外向性」($p<0.001$)，「C：良識性」($p<0.001$)，および「N：情緒安定性」($p<0.001$) においては，女子ジュニアテニスプレイヤーの方が，同世代一般女子よりも有意に高かった。また，「A：協調性」において，女子ジュニアテニスプレイヤーの方が同世代一般女子よりも高い傾向がみられた ($p<0.10$)。そして，「F：頻度」，および「O：知的好奇心」では，有意差はみられなかった。

(4) 男子地域ジュニアと男子トップジュニアの比較

「Att：建前」($p<0.001$)，「E：外向性」($p<0.001$)，「A：協調性」($p<0.001$)，「C：良識性」($p<0.05$)，および「O：知的好奇心」($p<0.001$) にお

いては，男子トップジュニアテニスプレイヤーの方が，男子地域ジュニアテニスプレイヤーよりも有意に高かった。そして，「？：不応答」，「F：頻度」，および「N：情緒安定性」においては，有意差はみられなかった。

参考文献

（1）　田中伸明・中島宣行・佐藤雅幸：テニスプレイヤーの集中力と性格の関連性 ── 10代テニスプレイヤーについて ──，日本スポーツ心理学会第27回大会研究発表抄録集，2000，64-65

（2）　田中伸明：ジュニアテニスプレイヤーの集中力について ── 大学生テニスプレイヤーと比較して ──，明治大学教養論集，456，2010，73-85

（3）　田中伸明：ジュニアテニスプレイヤーのタイプと集中力について，明治大学教養論集，465，2011，105-129

（4）　村上貴聡・徳永幹雄：全国選抜ジュニア・テニス選手権出場選手の心理的競技能力に関する研究，テニスの科学，10，2002，56-68

（5）　猪俣公宏：ジュニア期のメンタルマネージメントに関する研究，平成5年度日本オリンピック委員会スポーツ医・科学研究報告 No. Ⅲ ジュニア期のメンタルマネージメントに関する研究第1報，1994，2-4

（6）　田中伸明・佐藤雅幸：ジュニアテニスプレイヤーのメンタリティについて（Ⅰ）── 主要5因子性格検査から ──，東京電機大学理工学部紀要，24-No. 2 人文・社会編，2002，41-47

（7）　丹野義彦：性格の心理 ── ビッグファイブと臨床からみたパーソナリティ ──，株式会社サイエンス社，東京都，2003

（8）　村上宣寛・村上千恵子：主要5因子性格検査の尺度構成，性格心理学研究，6-1，1997，29-39

（9）　村上宣寛・村上千恵子：主要5因子性格検査の世代別標準化，性格心理学研究，8-1，1999，32-42

（10）　村上宣寛・村上千恵子：主要5因子性格検査システム，学芸図書，東京都，1999

（11）　村上宣寛・村上千恵子：主要5因子性格検査ハンドブック改訂版，学芸図書，東京都，2008

（たなか・のぶあき　文学部准教授）